夷賓閣と幕末の那珂湊

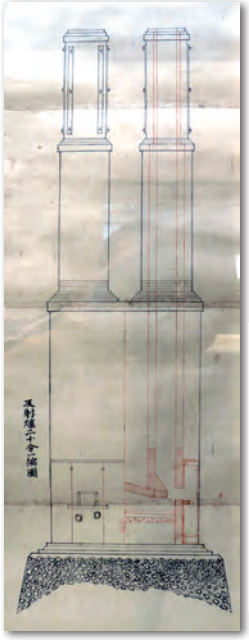
展示目録の一部から

湊村の繁栄と光圀

江戸時代の湊村（那珂湊）は、奥州や北海道と江戸を結ぶ東回り航路の中継港として繁栄しました。江戸後期の「関東自慢繁昌競」という見立て番付には、東の関脇に「水戸湊」として格付けられたほどでした。

水戸藩は初代頼房の時代から湊村を要衝の地として重視し、2代光圀は隠居後の晩年、元禄11年（1698）に夷賓閣（湊御殿）を太平洋と那珂川河口を望む日和山と称する高台に建設しました。前後して光圀は、御船蔵と水主組の設置、蝦夷地探検、湊村の町割、那珂川対岸の願入寺造営等の施策を矢継ぎ早におこないました。那珂湊の八朔祭りの格式を定めたのも光圀だと伝えられています。

関東自慢繁昌競（東京大学史料編纂所蔵）



反射炉建設の棟梁・飛田興七（とびた・よしち）が描いた反射炉の設計図面（ひたちなか市蔵）

斉昭の反射炉建設

歴代藩主はしばしば夷賓閣を訪れましたが、なかでも9代藩主斉昭は静養だけでなく、海防面からもこの地を最重視しました。この時代、常陸沖にもしばしば異国船が現れるなか、斉昭は幕府の海防参与に復権すると、鉄製大砲鋳造をめざし反射炉建設に着手しました。

反射炉とは鉄を溶かすための金属熔解炉のことで、火炎を炉内の壁面に反射させて効率良く熱を集める構造に由来しています。安政元年（1854）に着工し、翌年に第1炉、同4年に第2炉が完成、およそ20門の大砲を鋳造しました。反射炉は天狗党の乱で破壊されましたが、昭和12年に市内外から資金が寄せられ、昭和12年に復元されました。

反射炉の耐火煉瓦（左）と砲弾

夷賓閣の「御門」が描かれた明細絵図（ひたちなか市蔵）

また、斉昭はさまざまな藩政改革を断行しました。そのひとつが天保13年（1843）の藩内の検地命令です。商家が多かった湊村では、各戸の間口・奥行き・面積ほか所有者を詳細に調査し、1冊（70丁）にまとめました。絵師・亀遷幽の署名がある。「常陸湊村町内別明細絵図」は美術的にも貴重なものです。

そして 天狗党の乱

水戸藩は光圀の時代に大日本史の編纂に着手するなど、尊王敬幕思想の「水戸学」が広まりました。斉昭の時代に入り異国船の出没は、外圧に対する攘夷論を育て、時を待たず、尊王攘夷思想の拠点へと転換していきました。一方、江戸詰めが常であった水戸藩は、国許の門閥派との対立を生み、斉昭や藤田東湖の死後、内部抗争が激化、ついに元治元年（1864）、天狗党の乱へ突入しました。

天狗党の乱で幕府軍の援軍として派遣された福島藩士の墓

天狗党の乱の「合戦場略図」

同時開催

天狗党 長谷川庄七の生涯

長谷川庄七は、行方郡芹沢村（現行方市芹沢）芹澤家本家の生まれ。天狗党の筑波山挙兵に参加し、元治元年8月16日、那珂湊の攻防戦で日和山に陣取っていた諸生党を討つべく、一番槍を務め突破口を開いたが、弾に倒れ戦死第1号となった。その出自は、新選組局長・芹澤鴨と関係が深い。

長谷川庄七の墓碑

水戸天狗党絵巻より